

編 集 後 記

2022年12月12日、京都・清水寺にて今年の漢字「戦」が発表された。今年は、コロナ禍が収まらない年明けスタート、2月ロシアによるウクライナ軍事侵攻、7月安部晋三元内閣総理大臣銃撃事件、幾度も北朝鮮による弾道ミサイル発射など、私たちの生活を震撼させる多くの痛ましい事件が起きた。また、自然災害では、夏の相次ぐ能登半島の地震、大雨による浸水被害などが起き、県内や北陸三県で甚大な被害が続く異例の年であった。一年を振り返ると、暗く悲しい出来事が起きた一方、スポーツ界では、明るく元気なニュースも続いた。夏の高校野球全国大会では、東北勢で初となる仙台育英高校が優勝。サッカーワールドカップでは、強豪といわれるスペインやドイツを破り、決勝大会進出という偉業を果たすことができた激動の一年であった。

こうした年に、本学園では星稜高校教諭時代から45年の長きにわたりご尽力いただいた本田実先生と突然の別れが来た。星稜高校時代は、国語科教諭として道徳教育に力を注がれ、生徒の人的成長を誰よりも大切にされてきた先生。野球部顧問として、更には教頭、副校長の職に就き、人間教育を大切に学校経営にも尽力された先生。高校退職後も、短期大学の特任准教授として、また大学の非常勤講師として、学生の人的成長や心の教育に何よりも情熱を注いでこられた先生。生徒や学生が常に輝く環境を整え、厳しさの中に多くの愛情を注いで来られた先生に、改めて感謝の念で溢れている。

私自身は、恥ずかしながら本田実先生にご挨拶させていただく機会が無かった。というのも、本田先生が特任准教授を終えられた後に着任したため、直接関わらせていただくことはできなかった。しかし、研究職に就く前の前職が私学の高校教諭であったこと、また井上円了の哲学校である東洋大学を母校とすることから、不思議と本田先生とのつながりの深さを感じずにはいられない。

特に、短大でのゼミナール運営において常に本田先生のスタイルが私のモデルケースとなった。この度、「星稜論苑」を編集するにあたり、多くの先生方から本田先生の魅力を教えてもらった。何よりも実践教育に情熱を注いできたこと、短大学生を学外活動へ連れていき、活躍の場を大いに作られてきたことを改めて知った。編集作業途中の12月に、私自身も19名の学生を連れてゼミ合宿に行ってきた。まだまだ先生にはとても追いつけまいが、大学のアカデミックな空間において現場主義、実践教育の理念を持ち続けてこられた本田先生の教育方針の一端でも、近づくことができればと願っている。これからも日々精進していきたい。

改めて本田実先生へのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(本特集号に際し、ご執筆いただいた皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。)

令和4年12月 Takako.T